淑徳大学性における、コミュニケーションにおいて開示する話題の内容の差異
―自認するコミュニケーション・スキルと性差による比較・検討―

B33085　村瀬弘幸

はじめに

対人関係の親密化に関して、自己開示の多さ・深さが大きく関係することは多くの研究で示されている。ここで、発信者自身に開示した自己を相手に伝達する技術がどれだけあるか、という点に問題はないだろうか。

本研究において「自己開示」とは、森脇(2002)の示した「他者に対して，自分自身に関する情報を言語を介して伝達すること」を指すことにする。

研究史

自己開示の性差については多くの研究がなされている。その多くにおいて、青年期のコミュニケーションは同性の友人に最も多く自己開示をし、女性のほうが男性より多く深い自己開示をすることが明らかになっている。また多川・吉田(2006)は、現在の自分の状況や、相手に対する感情を伝えることも重要だと示している。

目的

淑徳大学の学生について、自認しているコミュニケーション・スキルや自己開示をする相手によって自己開示量の多さにどのような傾向があるか比較・検討を行うものである。本研究は質問紙調査を行うため、得られるデータは回答者の主観であることを考慮し、本研究で扱うデータは、自認しているものとして扱う。

方法

千葉県淑徳大学第一キャンパス在学中の実践心理学科及び教育福祉学科の大学生 144 名を調査対象として、質問紙調査を行った。（男性 57 名、女性 87 名）平均年齢は 21.04 歳であった。

調査項目

1)被験者のコミュニケーション・スキルのうち、発信する能力の測定

藤本・大坊(2007)の ENDCOREs のうち、「自己統制」「表現力」「自己主張」の下位尺度を各 4 項目、計 12 項目を使用した。回答は、“かなり得意…7”“得意…6”“やや得意…5”“ふつう…4”“やや苦手…3”“苦手…2”“かなり苦手…1”の 7 件法で被験者自身について回答を求めた。

2)同性友人についての質問

「あなたが最も親しいと思う同性の友人を一人思い浮かべてその人物のイニシャルと年齢を記入して下さい」という設問文と教示から始め、イニシャルと年齢を書かせた。その後、各尺度の質問に回答してもらった。

3)同性友人に対する自己開示についての質問

榎本(1982)の ESDQ を使用した。回答は、“まったく話したことがない、または偽ってきた…0”“一般的なことだけ話す…1”“十分詳しく話す･･･2”の 3 件法で同性友人について回答を求めた。

4)同性友人に対する日常的な話題についての質問

多川・吉田(2006)の日常的コミュニケーション尺度のうち、「日常的な報告」の全 12 項目、「不満や要望の率直な表明」の全 8 項目の合計 20 項目を使用した。回答は、“非常にあてはまる…7”“あてはまる…6”“少し当てはまる…5”“どちらともいえない…4”“あまりあてはまらない…3”“あてはまらない…2”“全くあてはまらない…1”の 7 件法で同性友人について回答を求めた。

5)異性友人についての質問

「恋愛関係を除き、あなたが最も親しいと思う異性の友人を思い浮かべてその人物のイニシャルと年齢を記入して下さい」という設問文と教示から始め、イニシャルと年齢を書かせた。その後、各尺度の質問に回答してもらった。なお、いない場合は記入せず、被験者の属性についての質問に回答するように教示した。

6)異性友人に対する自己開示についての質問

異性友人について、3)同性友人に対する日常的な話題についての質問と同様の質問に回答を求めた。

7)異性友人に対する日常的な話題についての質問

異性友人について、4)同性友人に対する日常的な話題についての質問と同様の質問に回答を求めた。

8)被験者の属性についての質問

被験者の性別、学科、年齢についての解答を求めた。

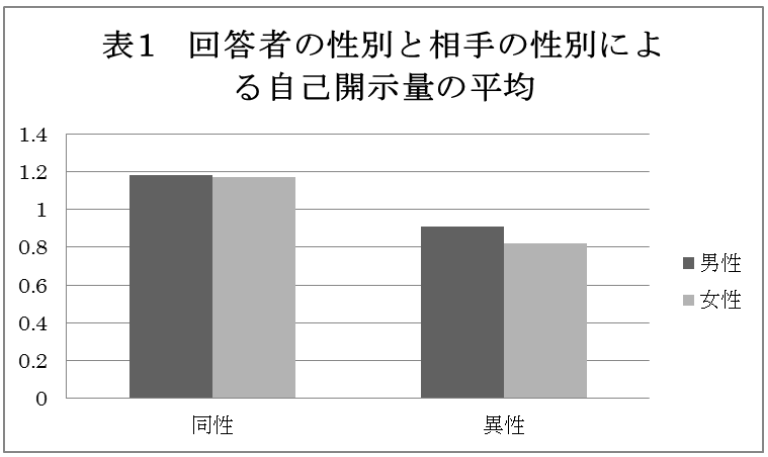
結果

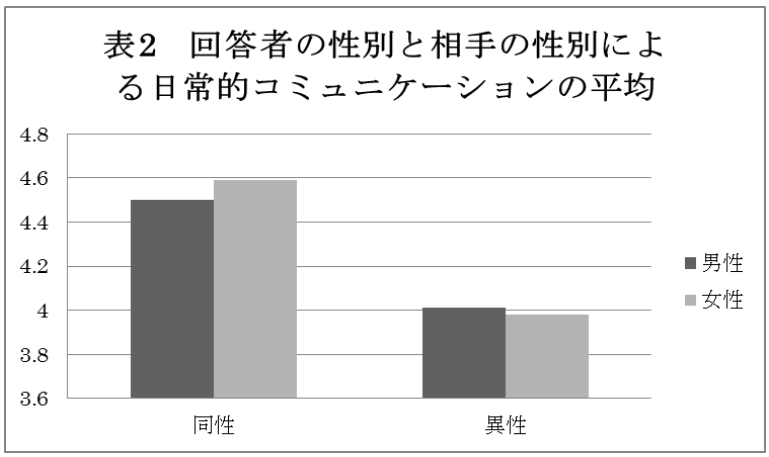
以下の仮説について、それぞれ検討を行った。

1. コミュニケーション・スキルが高いと自己開示がより多くなる
2. 自己統制の得点が高いと自己開示の量は低下する
3. 表現力が高いと自己開示がより多くなる
4. 自己主張が高いと自己開示がより多くなる
5. 相手による自己開示度の違いに関しては、男女とも同性の友人に対する自己開示度が最も高い

調査の結果、どの仮説も支持された。これにより、自認しているコミュニケーション・スキルの高さと自己開示量は関連していると思われる。

また自己開示をする相手との性別の観点から検討を行ったところ、表１と表２より、異性の友人より同性の友人に多く開示する結果だった。これは先行研究と同様の結果だった。





また、表１より、男性のほうが女性より自己開示量が多いという。先行研究と異なる結果が出ている。

考察

多くの先行研究では同性友人への開示において、女性のほうが男性よりも自己開示量が多いが、本研究では男性のほうが女性より自己開示量が多い。このことについて、尾崎・久東（2009）は友人と対面中心の「対面派」よりも、多くの場面で携帯メールを用いる「携帯メール派」の方が、自己開示を回避する傾向にあると主張している。加えて、榎本(1982)の研究が行われた時代には携帯メールや SNS が普及していないことが考えられ、携帯メールや SNS の普及という時代背景によるコミュニケーションの変化が起因していると考えられる。

参考文献

榎本 博明 （1982） 青年期における自己開示性(2)(対人意識・対人関係,人格） 日本教育心理学会総会発表論文集（24） 日本教育心理学会 474-475

尾崎 かほる 久東 光代 （2009） 女子学生の友人への自己開示についての考察―対面と携帯メールによる自己開示度の比較― 日本教育心理学会総会発表論文集 （51） 日本教育心理学会 412-413

多川 則子 吉田 俊和 （2006） 日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響 社会心理学研究 第 22 巻第２ 号 日本社会心理学会 126-138

藤本 学 大坊 郁夫 （2007） コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究 Vol. 15 No. 3 (2007) 347-361

森脇 愛子 坂本 真士 丹野 義彦 （2002） 大学生における自己開示方法および被開示者の反応の尺度作成の試み 性格心理学研究 第 11 巻 第１号 日本パーソナリティ心理学会 12－23